



釜石編住居復興スタジアムを後にし駐車場に向かうお客さま (2019年7月27日)

がんばろう!  
**岩手**  
 Cheer up! の Sports of Iwate  
**スポーツ** 連載 55  
 文・写真 ● 平藤 淳

平藤淳  
 (ひらふじ・じゅん)  
 1956年岩手町生まれ。筑波大学卒業。県立高校、県教育委員会、県体育協会の勤務を経験。ラグビー、スキーが専門。

# 特別な試合

7 月27日に岩手県釜石市の釜石編住居復興スタジアムで行われた、ラグビーのパシフィックネイションズカップ第一戦、日本対フィジーを見に行ってみました。

スタジアムの駐車場から大勢でぞろぞろと歩き、入り口で荷物検査やボディチェックを受け、応援の真っ赤な旗をもらい、売店の長蛇の列にあわて、競技場の大きさや芝の綺麗な緑色や大きなスクリーンに度肝を抜かれ、13000人を超すお客さまとともに、ゲームの開始を待ちました。

ゲームは世界ランキングで上位にあるフィジーを日本代表が破るという快挙。選手の頑張りもさることながら、暑い日差しの中、大漁旗を模した応援の旗や日本代表のレプリカジャージでスタンドを赤く染め、熱く応援してくださった皆さまの力も勝利を後押ししたのでしょう。素晴らしいプレーと応援で感激一杯の日でした。

突然ですが、私はプロレスも大好きなのです。プロレスには「ギミック」や「アングル」などという筋立てのようなものがあり、それを背景にリング上の戦いを見ると面白さがぐんと増すのです。簡単に言えば、ギミックは得意技や経歴などレスラーのキャラクター

のこと、そしてアングルは試合の背景にある選手どうし・団体どうしの抗争や、ベルト争奪などにまつわる歴史・エピソードです。私は、日本対フィジーのラグビーの試合にもこれらの背景があるように感じながら観戦してきました。

日本代表チームには、外国出身ながら日本代表のジャージに身を包んだプレーヤーがたくさんいました。一度、日本代表でプレーすると生まれ育った国の代表となることができなくなるのですが、日本のチームに所属して、日本を「ラグビーの母国」とすることを選択した選手がたくさんいたのです。

一方、フィジー代表は、普段はイギリスやフランス、スコットランドそしてニュージーランドのチームで活動しているプレーヤーがほとんどでした。異なる経歴を持つ選手たちですが、それぞれがチームの勝利のために鍛えに鍛え、観客を感嘆させる超人的な力と技術を発揮しました。これが「ギミック」でしょう。

盛岡駅とスタジアムの間は直線の臨時バスで移動しました。発車してすぐ、信号を一つ過ぎたあたりでバス前方のテレビモニターに動画が映し出されました。201

1年の東日本大震災津波の被災地の方々が「その後」をお話しし、国内外からのご支援に感謝を述べこれからの決意を語るという内容のものでした。その映像を見ながら、日本代表チームのコーチが「釜石で試合をやる意味を考え、逃げない試合、逃げないスクラムを組みたい」と話したという報道を思い出し、私は、バス出発直後から「特別な試合」のモードに入ったのです。多くの方々も、そういう気持ちになったに違いありません。

津波で押し流された学校の跡地に建てられたこのスタジアムで行われる、国代表どうしの試合が特別な意味を持つことは、選手も全国各地から応援に駆け付けたお客さまも炎天下で働いている係員、ボランティアスタッフ、そして売店の人：誰もが知っています。

この試合の「アングル」は、横浜国際総合競技場や花園ラグビー場が持っていない「復興のマイルストーン」です。

でも、間違っただけではありません。マイルストーンは最終目的地ではありません。本当の行き先は、その先にあるはずですよ。9月と10月に釜石で行われるワールドカップで、もう一度、行き先を確認してみます。楽しみです。